

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 現代における宗教・科学・フィクションが重なり合う領域の事例と理論的分析

氏 名 谷内 悠

宗教・科学・フィクションという三つの領域は重なり合う部分をもっており、そこには現代的なさまざまな重要な事象とそれに伴う問題が見られる。本論文は、そのような事例とそれを扱う宗教社会学的理論を取り上げ、検討した上で、分析哲学的議論を参照しながらそれらを包括的に論じることを可能にする理論を提案するものである。

序論では、どのような問題があるかを概観した上で、出自はフィクションでありながらやがて宗教と捉えられるようになった事例と、そのような現象を扱うための 2000 年代以降の宗教社会学における議論が、とりわけ実在および現実／虚構という観点から重要であること、その周辺まで視野に入れることで、科学も含む本論文の関心を貫く現象を見ることができることを示した。その過程で、フィクションから宗教へと転化した代表的な事例として、映画『スター・ウォーズ』から生まれた「ジェダイズム」も紹介した。

以下は三部から構成される。第一部では上記の宗教社会学的理論、第二部では事例を取り上げ、検討、整理した。第三部ではそれらを受けて、分析哲学を用いた理論を提案した。

第一部では、宗教社会学において上記のような事例を扱う三つの概念、「ハイパーリアルな宗教」、「つくられた宗教」、「フィクションに基づいた宗教」を見た。第一章ではまず、これらの背景に世俗化、消費主義、個人主義、宗教的真理の相対化と宗教概念の再考、ポピュラーカルチャーとインターネットの興隆といった宗教社会学の議論があることを示した。

その上で、それぞれの概念の内容および互いの共通点や相違点等を分析した。第二章で取り上げたハイパーリアルな宗教は、ジャン・ボードリヤールのハイパーリアリティ概念の再解釈で、ポピュラーカルチャー(フィクション)に依拠する、すなわち実在・現実を表さないにもかかわらず信者にとっては「リアルよりリアル」なものである。例えばジェダイズムにおいては、『スター・ウォーズ』がフィクションであることを認められているにもかかわらず、作中の「フォース」という力が実在すると信じられている。

第三章では、想像の産物であることが認められている教えであっても、個人に意味を提供し、宗教のようなはたらきをうまくしていれば宗教として成立するという考えに依拠した、つくられた宗教について論じた。虚構の物語の力を説明するため

に、認知宗教学の知見が導入されている点が重要である。

第四章で取り上げたフィクションに基づいた宗教では、フィクションのテキストが権威あるものとして使われる。フィクションとは、現実世界への指示であると意図されないものとされる。一方で、そこに書かれている超自然的なものの存在を事実だとすることが宗教定義の中心に置かれる。ここには二つの解釈軸が見出させた。

第五章ではこのことから、「テキストがフィクションに基づくか歴史に基づくか」、「人がテキスト内の超自然的／自然的対象を実在すると信じるか否か」をそれぞれ横軸縦軸とした図を提案し(科学的立場のものを扱うために、縦軸には自然的対象を含める)、図(下図参照)の(1)から(4)までのどの領域にこれまで見てきた三つの概念が位置づけられるかを考察することで、それらを整理、統合した。それぞれ広がりをもつ概念だが、三つが交わるのは、フィクションの中の超自然的対象が実在すると信じるという矛盾した状態にある(1)であることを示した。

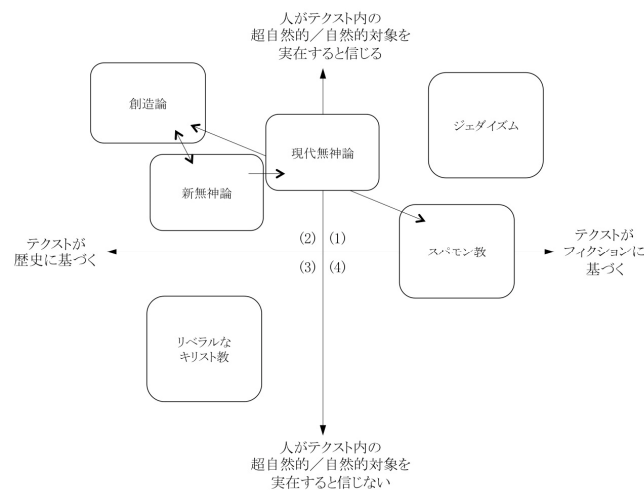
第二部では、以上を踏まえて事例を分析した上で、それぞれ図のどこに位置づけられるかを検討した(下図参照)。第六章では、背景として重要となる基督教の創造論——宇宙や生命の起源についての聖書の記述を多かれ少なかれ信じるもの——について、創造論運動の歴史に沿って概観した。その上で、特に2000年代に問題となった、科学を装う創造論の一種であるインテリジェント・デザイン論(以下、ID論)の内容と科学側との論争を詳述し、問題の所在等を明らかにした。

第七章では、主に科学的な見地から宗教を批判し、無神論のポジティブな世界観を広めようとするものとされる新無神論について、その語の誕生の経緯や、主要な著者(リチャード・ドーキンスとダニエル・デネットを取り上げた)の著作の共通点と相違点などを示した。また、神の存在を科学的な仮説と見なす神仮説の考え方が新無神論だけでなく保守派にも見られることは重要であり、そこには確実性や権威の探究と絡んで、競合する実在という問題があることなどを指摘した。

さらに、新無神論をはじめとする無神論的な著作を読み、無神論的な運動に参加するなど、受容する側の大衆により焦点を当てたものとして現代無神論を扱った。これは科学や自然についての理想化されたイメージを信奉していることから、ハイパーリアルな側面をもつとされ、科学信仰的とも言える。

第八章では、ID論への抗議として生まれた空飛ぶスパゲッティ・モンスター教(以下、スパモン教)を取り上げ、これがID論や創造科学、その他の疑似科学的体系の論法をパロディ化することによって、それらがもつ問題を浮き彫りにするという構造をもっていることを明らかにした。スパモン教は現実への影響力も強めており、(4)から(1)に転化しつつあるものと言える。さらにその基礎は科学でありながら宗教の形式を模倣しており、かつ、フィクショナルな出自が認められているという複雑な構造を有している。

また、隠喩的に聖書を解釈するようなリベラルな基督教が(3)に含まれる。



第一部の三つの概念と第二部の事例において実在が重視されていることから、第三部ではまず第九章において、実在についての哲学的議論が必要であることを論じた。とりわけ現代的な本論文の対象においては、科学的実在論およびそれに準じた実在に関する議論を参照するのが適しており、ボードリヤールのハイパーリアリティの議論も再検討しつつ、図の各領域がその観点からどう捉えられるか論じた。また、第一部、第二部の議論から得られた、(1)においては指示対象が欠如していながら実在すると信じられているという二律背反の状況があること、スパモン教のように(4)から(1)へという転回が起こりうること、創造論が科学に基礎づけられようとするといった宗教と科学の捻れや、現代無神論やスパモン教が内包する依拠するものと実態との乖離という捻れがあることなどの点は、単層の理解ではうまく説明できないこと、分析哲学の大家である W. V. O. クワインの議論が、これらを論じるのに適した理論枠組みを提供することを示した。

第十章では、クワインの議論について詳述した。その上で、クワインは存在論的相対性などの相対主義的議論を行っている一方で、善意の原理や感情移入といった相対性を押し留める考えも導入していることを明らかにした。そして、クワインの概念図式という概念は科学をモデルとしてつくられているが、野家啓一の議論などを元に文学や宗教などにも拡張可能なことを示した。その結果、概念図式は状況等に応じて選択可能で使い分けられるものであり、実在および現実と虚構の区別は概念図式の採用に応じて流動的、相対的であると捉えることができた。さらに議論を展開して、そのような相対性を押し留め、概念図式を選択を適切に行うことによってコミュニケーションを担保するメタ概念図式というものを措定し、概念図式(相対主義的なもの)／メタ概念図式(相対性を押し留めるもの)という二重構造を提案した。

第十一章では、相対主義的とされているルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインも言語ゲーム／世界像、ネルソン・グッドマンもヴァージョン(世界制作)／習慣の守りという観点から、クワイン同様、相対主義的なものと相対性を押し留めるものの双方とそれらの二重性に言及していると言えることを示した。また、野家の議論から、エトムント・フッサールもまた、客観的学問／生活世界という二重性を想定しており、さらにそれらの間に解釈学的循環があるという指摘をしている。本論文では、これらを統合して「二重の概念図式モデル」を提起した。重要なのは、メタ概念図式が本当に他者と共有されているかを確認する術はなく、それは「根拠」ではないということ、よって現実とされるものには不確定性が残るということである。さらに、本モデルでは、概念図式とメタ概念図式に対する二つの「信」が重要であること、二重構造の動的な相関(解釈学的循環)によってモデルを強化することで、第一部、第二部で示し、第九章で整理した事態をより適切に説明できるようになることを示した。現代における科学とメタ概念図式の関係についても触れた。

また、相対主義と普遍主義という、人類学などでも長らく考えられてきた問題における合理性概念について本モデルからなにが言えるかを、スタンレー・J・タンバイアを参照しながら論じた。そして、諸文化のメタ概念図式にある程度共通していると考えられる「普遍主義的な論理的合理性」と、概念図式レベルで個々の文化的現象について考える際の「多元的合理性」として、階層構造を導入することで合理性概念の混乱を一部解消できると指摘した。また、認知宗教学等の研究を受けて、人間が生物として進化してきた結果、共通してもつものとしての「生物学的合理性」についても考察した。また、このように自然科学の知見を、科学の概念図式を含むモデルに利用すること、宗教学が科学と手を携えることの是非についても触れた。

最後の第十二章では、本論文の図および図上での実在について本モデルからなにが言えるかを総括して考察するとともに、第十一章で論じきれなかったものについても、本モデルによって理解を深められることを示した。